

平成24年度 課外授業講師派遣 活動レポート

第1回 砺波市立庄川中学校

6月19日(火)、平成24年度第1回の川合声一氏(日の出屋製菓産業(株)取締役社長)が砺波市立庄川中学校において、2学年54名を前に、「働く魅力」と題して課外授業を行った。

川合氏は、まず、仕事の心得に関して、「働く」とは「人」+「動」であり、「人のために『動く』こと」、「人を『感動』させること」が大切であると述べた。また、働く際には地域の人々への貢献を忘れてはいけないとし、自然循環型企業を目指す自社の取り組みや、地域や社会への貢献活動、東日本大震災への支援について紹介。南相馬市のPTAなどが企画した「南相馬こどものつばさ」プロジェクトに協力し、餅つきイベントを通じて、被災地の子どもたちに

喜んでもらえたことなどに触れた。さらに、地域貢献のためには、自分が生まれ育った地域の歴史や文化を知ることが大切であり、それが働く意味にも繋がってくる、と力説した。

最後に、「人のために動く」の「人」とは家族や友達のことであり、その人たちのために動くことで今日から地域貢献が始められる、と説くとともに、14歳の挑戦では、「人のことを考えながら、一生懸命チャレンジして欲しい」とエールを送った。



働く魅力、地域貢献の大切さを熱く語る、川合社長

第2回 高岡市立平米小学校

6月20日(水)、高見貞徳氏(株アイベック取締役会長)が高岡市立平米小学校において、全学年129名を前に、「夢に向かって努力する大切さ」と題して課外授業を行った。

高見会長は、冒頭、児童たちに「夢は何か」と尋ね、「将来なりたいものは」と問い掛けた。子どもたちに思い思いに答えさせたうえで、「夢を忘れないように頑張ってもらいたい。夢を決めていない人は早く決めないといけない」と述べ、「夢の実現のためには頑張らないといけない」と強調した。そして、夢を実現させるためには、小学生の頃から「当たり前なことを当たり前に行う」ことが必要だと説いた。言葉で言うのは簡単だが、実際に実行するのは厄介な問題で、

優しさ、遅しさと我慢をバランスよく身に付けてほしいと続け、そのためには、①「礼を正す」－「ハイ」「おはよう」「ありがとう」のあいさつを、明るく、はっきりと自分から行う、②「場を清める」－整理整頓、清掃し、履き物を揃え、椅子を机に入れる、③「時を守る」－遅刻しない約束を守ること、が大切だと訴えた。

当日は学習参観日であり熱心に耳を傾ける児童と共に、保護者も多く聴講しており、保護者に向けた熱いメッセージともなった。



夢のためには「当たり前なことを当たり前に行う」ことが必要と語りかける、高見会長

第3回 黒部市立宇奈月中学校

6月22日(金)、市森友明氏(株新日本コンサルタント取締役社長)が黒部市立宇奈月中学校において、2学年50名を前に、「今、何をすべきか。－社会に学ぶ『14歳の挑戦』に向けて－」と題して課外授業を行った。

市森社長は、はじめに、自己紹介をしながら、「中学生時代には数学や英語を勉強して何の役に立つのだろう」と思っていたが、実際に仕事をして、数学や英語が必要だったと、学習の意義を強調した。

つぎに、社会人の心構えとして、中学生も社会人も「目の前のことに努力すること」は同じだが、努力はしんどいし、努力しても成果がないことがあると述べ、そして、「100回叩けば突破できる壁があっても、99回であきらめてし

まう人がいる。その人は今までの努力やかけてきた時間が無駄に終わってしまう」という松岡修造氏の言葉を引き、「成長の壁」で諦める人が多いと語った。

成長している実感がなくても努力する動機ができ、「成長の壁」までは成果がでないが、「成長の壁」を超えると勉強も仕事も楽しくなる。

「このことをわかっているだけで大きな差になる」と強調した。

最後に、「努力は幸福を手に入れる手段ではなく、努力そのものが幸福を与えてくれる」というトルストイの言葉で生徒たちにエールを送り、締めくくった。楽しくなると語りかける、市森社長



「成長の壁」を超えると勉強も仕事も楽しくなると語りかける、市森社長

第4回 黒部市立鷹施中学校

7月4日(水)、中尾哲雄氏(株インテック取締役最高経営責任者)が黒部市立鷹施中学校において、全学年247名を前に、「ありがとう」と題して課外授業を行った。

中尾代表は、小学2年生の頃の犀潟駅での体験を紹介し、感謝の気持ちをしっかり伝えることの大切さを説いた。そして、「わが家のきまり」の第1条は「お礼を言うこと」と続け、「私たちは日頃色々な方からお世話になっていることに気付いていないことが多い。感謝の心を持つことが大切で、直接お礼を言うことができない場合は、勉強して社会のために役に立つように働く。お礼の仕方にも色々ある」と論じた。

また、自身の夢についても触れ、「最初夢はともても実現しなかった。夢は実現しなくてもよい。夢

に向かって努力することが大切だ」と強調した。

さらに、高校生のとき、英語の先生に教わった英文の和訳「希望は遠い星の光 うつむく者には見えない」を紹介し、先生の指導や言葉の思い出を心の支えとして生きているとし、「先生を尊敬し、感謝することが大事である」と生徒たちに呼び掛けた。

最後に、「みなさんは色々なことを教わっている。そして、そのことによって成長している。感謝の仕方は立派に成長することだ」と述べ、「今日は静かに熱心に聴いてくれて『ありがとう』と述べ、講演を締めくくった。



感謝の心をしっかり伝えることが大切と語る中尾代表

第5回 射水市立大門中学校

7月13日(金)、本川祐治郎氏(株ブランドドットコム代表取締役・経営士・ファシリテーター)が射水市立大門中学校において、1学年246名を前に、「〈はたらく〉ことの意義について」と題して課外授業を行った。

本川代表は、はじめに「働くとは人が動くことであり、人が力を重ねること」と述べ、会社は様々な種類の力を重ねる場所であると説いた。そして、力を合わせることで、人と競争することの2つのルールを上手に使い分けてほしいと語りかけた。

続いて、「10人くらいと握手しよう」と呼びかけ、結果として①10名以上の人と挨拶ができたか、②意味のある情報を交わしたか、③ほめあい・励ましあいをしたかを生徒たちに確認させ、言われたことのみをやるのではなく、一歩踏み出して行動しようと強調した。

また、得意なことを伸ばそうと呼びかけるとともに、「目的にたどり着くことだけが幸せではない、どのようなたどり着き方をしたかが充実感を決める。その上でどんな仕事をしたいか考えてほしい」と語った。

最後は、仕事には、①「イヤイヤ」働く=L ABOR、②「ふつうに」働く=JOB、③「ニコニコ」働く=WORKがあると人に教えられたが、④自分らしくふるまったり、人のよいところをまねたりするなど

「ワクワク」働く=PLAYもあると紹介し、「職場体験では多様な人と力を重ねて、社会に貢献してきてほしい」とエールを送り、締めくくった。



「働くとは人が力を重ねること」と語る本川代表

第6回 高岡市立戸出中学校

7月20日(金)、山野昌道氏(株スカイインテック取締役社長)が高岡市立戸出中学校において、2学年121名を前に、「人生を楽しく生きる3つのコツ」と題して課外授業を行った。

山野社長は、「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」を終えた生徒たちに、「なぜ働かなければならないのか」「自分には何が向いているか」「仕事は楽しいものか」とは思わなかったかと語りかけた。そして、自分のやりたいことや夢は簡単にはわからないが、それでも何かを見つけるためには、考え続け、行動し続けること、つまり努力することが大切だと強調した。

「やりがい自分ですつくるもので、やりがいのある仕事はつらくて厳しい仕事だ。しかし、大変だったことや苦労したことが思い出になり、

成長もできる。楽な道より困難な道を選んでほしい」と呼びかけた。

最後に、人生を楽しむためのコツとして、①迷ったらやる、②人のせいにしない、③何をやってもうまくいく(ポジティブシンキング)の3つをあげ、「充実した学生生活を送るために、一日一日を大切に、勉強、スポーツや芸術などに努力して、一生の友達を作してほしい」と語り、「選択できることは幸せなことだ。人生で選択に迷った時、どちらが正解だったか絶対わからない。自分が選んだほうを正解にしていこう」と激励した。



努力が大切だと語る山野社長

第7回 射水市立奈古中学校

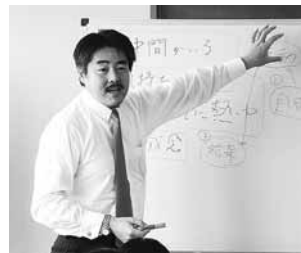
7月23日(月)、牧田和樹氏(株)牧田組取締役社長)が射水市立奈古中学校において、2学年61名を前に、「よりよく生きる ～学ぶこと、働くこと～」と題して課外授業を行った。

牧田社長は、秋に「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」に取り組む生徒たちに、「生活をしていて、どうしたら楽しいとを感じるか」と問いかけた。そして、「生活する」ことは、単に「生きる」ことではなく、「目的、行動、結果」の繰り返しであり、このことをいつも意識してほしいと呼びかけた。そのうえで、勉強を例にとり、「やりたいと思わないのは楽しくないからだ。できなかったことができる喜びを感じ、成長を確認することが、やりたいと思う原動力になる」と強調した。

また、世の中の全てのことには、原因と結果

があるので、職場体験では、結果を考えて頑張っている」と語った。

さらに、学生時代も社会に出てからも、人間関係が大変重要だと語り、「人はひとりでは生活していけない。人と人がつながる人間社会で生きている。どれだけの人間関係をつくれるかで幸せが決まる」と述べ、またいじめ問題では「人の嫌がることをしないこと、人の役に立つことを考えること。相手を思いやる心・優しさをもって対応すれば、仲間が集まり、勇気がわく」とエールを送り、締めくくった。



相手を思いやる心で行動するよう呼びかける牧田社長

第8回 富山県立八尾高等学校

9月12日(水)、中尾哲雄氏(株)インテック取締役最高経営責任者)が富山県立八尾高等学校において、2学年160名を前に、「君たちの未来」と題して課外授業を行った。

冒頭、中尾代表は、小学2年生の頃の犀潟駅での妹との体験に触れ、感謝の気持ちをしっかり伝えることの大切さを説いた。そして、『わが家のきまり』の第1条は『ありがとう』を言うこと』と続け、「私たちは多くの方からお世話になっており、感謝の心を持つことが大切。直接お礼を伝えることができない場合は、勉強して社会の役に立つように働く。お礼の仕方にもいろいろある」と述べ、自身が東北大学(中国遼寧省)で客員教授を務めていることや、「とやまのちの塔」の建立、カタール・富山の設立等を紹介した。

また、子どもの頃の夢について触れ、「夢は叶わなくても、もつことが大事である」と語るとともに、いじめについては、「自分の心が少しずつ腐っていく、決してやってはならない」と強く諭した。

後半には、恩師である高校時代の数学教諭への弔辞や、英語教諭 小澤梅子先生からの言葉「希望は遠い星の光 うつむく者には見えない」を紹介し、「恩師への敬意や感謝、先生と生徒の信頼関係が大事である」と生徒たちに語りかけた。

最後に「夢は人を輝かせ、希望は人を大きくする」と述べ、講演を締めくくった。



生徒代表からの謝辞を受け握手する中尾代表

第9回 黒部市立高志野中学校

9月19日(水)四十物直之氏(株)四十物昆布取締役社長)が黒部市立高志野中学校において、2学年109名を前に『働くこととは?』一皆さんに伝えたいこと』と題して課外授業を行った。

四十物社長は、「働くことは単に収入を得るためでなく、己を磨き社会に貢献することである」と語った。そして、スペインのバルセロナに伝わる2人の石工職人の話を紹介。2人のもとを訪ねてくる人に対して、1人の石工は不愛想に追い払う一方で、もう1人の石工は「こんなに素晴らしい建造物の建設に携わることができて光栄だ」と誇らしく語ったという。この話を引用して、「受け身ではなく積極的に仕事に取り組むことのできる人になってほしい」と述べた。

また、挨拶がしっかりできることが人間の基本であり、大切なことであると何度も強調した。

次に、スペインの宗教家フランシスコ・ザビエル、フランスの詩人ポール・クロードなどを紹介し、「日本人は昔から優れた民族であるとの評価を受けている。自信を持つことが大切」と語った。

最後に、藤尾秀昭氏(致知出版社社長)の著書『心に響く小さな5つの物語』から第5話「縁を生かす」を朗読し、出会いを大切にすることを生徒に訴え、講演を終えた。



挨拶をしっかりできることが大切と語る四十物社長

第10回 立山町立雄山中学校

9月19日(水)、浦山哲郎氏(学浦山学園理事長)が立山町立雄山中学校において、2学年271名を前に、『社会に出て働く』ということ』と題して課外授業を行った。

浦山理事長は、「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」を前にした生徒たちに、まず大会の紹介を兼ねて、8、9月の「伝えよう“親心”推進月間」の取組みを紹介した。そのうえで、「志」とは容易に入手できない遠くにあって近づけないものであり、努力した時に自分だけでなく社会全体のためになるもの、そして寝ても覚めても忘れないものであると語り、欲望との違いを強調した。授業の前に立志式を終えたばかりの生徒たちは真剣に聴き入っていた。

また、ひとの体の大きさは倍も変わらないが、

心の大きさは10倍、100倍、1万倍にもなる、心は心がけ次第で大きくなると説いた。

そして、基礎や基本は「生きる力」のベースであり、身だしなみをしっかりと生活環境を整えれば、志にも手が届くかもしれないと述べた。最後に、司馬遼太郎氏の『21世紀に生きる君たちへ』から「自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくられていない。このため、助け合うことが、人間にとって、大きな道德となっている。助け合う気持ちや行動のものは、いたわりという感情である」と引いて、締めくくった。



基礎や基本の重要性を訴える浦山理事長

第11回 富山国際大学附属高等学校

9月21日(金)、牧田和樹氏(株牧田組取締役社長)が射水市高周波文化ホールにおいて、富山国際大学附属高等学校 全学年810名を前に、「よりよく生きる」と題して課外授業を行った。

牧田社長は、冒頭、世に名を馳せる著名人は、残した結果で評価されていると説明し、「過程よりも結果が大切である。長い人生の中で、いかに結果を示すかを考えてほしい」と語った。

その上で、「結果を示すためには人に認めてもらうことが大切。それは異性との交際と同じである」と続け、人に認められるための「3つのポイント」を挙げた。

1つめのポイントである「時間は平等」では、皆が同じ条件で与えられている時間をいかに過

ごすかが重要であり、その積み重ねで一生が決まると解説。2つめの「人間社会で生きている」では、人は人の中で存在しており、人の心を理解することが大切であると説いた。そして、3つめの「人間力」は、『考え方』、『意欲』、『知恵』の掛け算であり、知恵には『知識』と『経験』が必要。どれも欠くことはできない」と述べた。

最後に「皆さんには可能性がある。諦めず、努力を惜しまず、素敵な人生を歩んで欲しい」とエールを送り、締めくくった。



相手を認め、思いやる気持ち大切と語る牧田社長

第12回 富山県立南砺福野高等学校

9月29日(土)、佐子裕厚氏(日本銀行富山事務所長)が富山県立南砺福野高等学校において、2学年普通科198名を前に、『経済の仕組みについて知ろう!』と題して課外授業を行った。

佐子所長は、まず、経済用語の説明を含めて、紙幣の発行や流通・管理、物価や金融システムの安定など日本銀行が果たしている役割を映像で紹介した。そのうえで、景気、GDPや財政政策・金融政策の役割など経済を知ることにより、新聞の経済欄が読めるようになり、またどんな仕事に就いても役に立つと語りかけた。

景気の説明では、『景気良く』とは積極的に支出していくこと』と述べ、ラーメンや食料品などを例にとり「景気はぐるぐる回り」と説き、生産、所得、支出(需要)の関係を説明した。そして、支出の中味を考えてみようと呼びかけ、

GDPをわかりやすく解説し、GDPを理解することで景気状況がわかると強調した。景気動向指数や景気循環に関する代表的な考え方も紹介した。

財政政策や金融政策の役割を説明した後、今後の日本経済の課題として、少子高齢化の進展による経済成長の鈍化について触れ、①成長分野への重点的な投資や内需の拡大、②トルコやインドネシアなど新興国への市場開拓や輸出の増加が必要であると述べた。生徒らは日本経済の課題や将来に思いをはせ、真剣な表情で熱心に聴講していた。



「経済を知ると新聞の経済欄が読みやすくなる」と語る佐子所長

第13回 富山県立魚津高等学校

10月6日(土)、新田八朗氏（日本海ガス㈱取締役社長）が富山県立魚津高等学校において、1学年199名を前に、「これからの日本を担うみなさんへ」と題して課外授業を行った。

新田社長は、はじめに「学校はひとのつながりの宝庫」で、この縁を一生大事にして欲しいと語りかけた。そして、好きな言葉として「one for all, all for one」をあげ、仲間を大切にしたいと述べた。

また、人は一生勉強しなければならないし、よりよく生きるために一生勉強とつきあっていこう、基礎はあまり面白くないかもしれないが、自分のやり方で工夫して楽しくつきあえるよう確立してほしいと呼びかけた。中学高校時代の勉強は人生の基礎となる、基礎がしっかりした家は災害にも強いと強調した。つづけて「なぜ勉強するのか。それは働いて世の中の役に立つため」と語り、人生を笑い多く幸せなものにする

ため、楽しむときは楽しむ、働くときは働く、苦勞するときは苦勞しようと激励した。

受験については「他流試合」と考えれば、「大学受験は全国、世界中の同世代との他流試合だ。嫌なことだと考えず、先に待っている楽しいこと、達成したときをイメージして頑張ろう、このバックキャストイングの考え方は社会に出て役に立つ」と語った。そのうえで、受験は絶対評価だが、ライバルは敵ではなく仲間なので、同世代の仲間の足を引っ張るのはよくないと訴えた。

最後に「失敗しても人生が終わることはない。諦めないという気持ちがあれば仲間が助けてくれる」とエールを送り、締めくくった。



「中学高校時代の勉強は人生の基礎となる」と語る新田社長

第14回 高岡市立伏木中学校

10月19日(金)、本川祐治郎氏（㈱ブランドットコム代表取締役・経営士・ファシリテーター）が高岡市立伏木中学校において、2学年126名を前に、「働くことの意義と心構え」と題して課外授業を行った。

本川代表は、はじめに、翌週に「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」に取り組む生徒たちに、みんなで握手しようと呼びかけた。そして、①10名以上の人と挨拶ができたか(主体的に参加ができたか)、②意味のある情報を交わしたか(常に考えたか)、③ほめあい、励ましあいをしたか(認め合ったか)を生徒たちに確認させて、社会では言われたことのみをやるのではなく、一歩踏み出して仕事をするのが大事と強調した。

次に、「働くとは人が力を重ねること」と述べ、社会ではチームで仕事をするのが大事であると説き、職場では何かを教えてもらうという受

身ではなく、職場によい影響を与えようという積極的な気持ちで望んで欲しいと語った。また、気持ちよく働くためには、あいさつ、礼儀やマナーが重要であると続けた。

最後に、仕事には、①「イヤイヤ」働く＝LABOR、②「ふつうに」働く＝JOB、③「ニコニコ」働く＝WORKだけでなく、④自分らしくふるまったり、人のよいところをまねたりするなど「ワクワク」働く＝PLAYがあると紹介し、「職場体験ではいろいろな人と力を重ねて、チャレンジしてきてほしい」とエールを送った。



「一歩踏み出して仕事をしよう」と語る本川代表

第15回 富山市立老田小学校

10月25日(木)、山崎義明氏（㈱山崎製作所取締役社長）が富山市立老田小学校において、4～6学年94名を前に、「夢といっしょに歩いていこう」と題して課外授業を行った。

山崎社長は、まず、会社の概要を説明し、オーダーメイドでの設備機械の製作は、お客さまの「思い・夢」を実現する仕事でもあると語った。次に生徒たちに、どんな夢を持っているかと問いかけた。男子児童は、野球選手やスポーツ選手、女子児童は、画家などと返答すると、「『夢』は、ちょっとしたことで手が届くものや、何十年もかかるものもある。夢がかなわず途中でくじけそうになっても、絶対あきらめないことが大切」と諭した。

後半は、最近の話題にも触れ、iPS細胞研究

でノーベル賞を受賞した山中伸弥京都大学教授の言葉である「重い病気の患者さんを助けることが『夢』。1回成功するために、9回失敗してはいけない」を紹介。続いて、フットサルに取り組むサッカーの三浦知良選手や、ヤンキースのイチロー選手、80歳でエベレスト登山に挑戦する三浦雄一郎氏などを紹介し、夢をもって取り組むことの大切さを子どもたちに語りかけた。

最後に、「常に挑戦し続けていくこと、一歩、一歩着実に努力し、『夢を忘れない』、『夢を膨らませる』ことが大事」と語り、講演を締めくくった。



「夢に向かって少しずつがんばることが大事」と語る山崎社長

第16回 富山県立大門高等学校

10月26日(金)、大橋聡司氏(大高建設(株)取締役社長)が富山県立大門高等学校において1～2年生240名を前に「夢を持つ」と題して課外授業を行った。

大橋社長は、まず、当会教育問題委員会の「海外教育事情視察」に触れ、フィンランド、中国、ドイツやスイスの教育事情を紹介。そして日本、中国、韓国の中学生の中で日本人の勉強時間が一番短いことを指摘し、グローバル化の進展の中で実力をつけることの大切さについて述べた。

次に自身が手がけるビジネスについて説明。多角化の一環で平成15年、巨大なレストランをオープンさせたが、数年後に閉店を余儀なくされた。しかし問題点を解決し、新たなレストラン経営にチャレンジし軌道に乗せることができた経験を踏まえ、「レストランは『存在感謝』を経営理念に掲げ、感謝の気持ちを持つことを徹

底している。皆さんも感謝の気持ちを大切にしてもらいたい」と語った。

そして、松下幸之助の「百聞百見は一験にしかず」という言葉を紹介し、これからの人生を歩んでいく上で、失敗を恐れずいろいろな経験を積んでほしいと論じた。

最後に、蒲島郁夫熊本県知事を紹介。蒲島氏は子供の時に牧場主、小説家、政治家の夢をもっていた。高校卒業後農協職員になったが、ネブラスカ大学で農業の研修後、ハーバード大学で学び、東京大学法学部教授、熊本県知事に就任した経歴を説明し、夢をもって、失敗を恐れずチャレンジしてもらいたいと語り講演を終えた。



チャレンジ精神が大切と語る大橋社長

第17回 富山市立南部中学校

11月9日(金)、林和夫氏(朝日建設(株)取締役社長)が富山市立南部中学校において、全学年531名を前に、「学ぶこと 働くこと」と題して課外授業を行った。

林社長は、まず、人間が他の動物と違う点は頭を使い広く社会と関わる存在であることと語り、だからこそ勉強しなければならないと説いた。そして、身近な問題や東日本大震災からの復興など様々な問題解決のためにも勉強が必要と語りかけた。また、「学ぶ」は「真似ぶ」と述べ、コンピュータに情報が入っていないと意味がないことを引き合いに出し、「からっぽの頭から創造力は生まれない」と、読み書きそろばん・暗記が大切であると力説した。

続けて、会話は話し手と聞き手がいることで成り立つとして、コミュニケーションはキャッチボールのようなものだと言った。実際に生徒とキャッチボールを行い、誤ったコミュニケーションのとり方をわかりやすく示し、会話の重

要性も強調した。

また、京セラの名誉会長 稲盛和夫氏の言葉を引いて、能力は「才能」「経験」「意欲」「考え方」の掛け算だと紹介し「マイナスの考え方をすると結果はマイナスになる。プラス思考が大切である」と論じた。

さらに、「働く」の語源は「端(周りの人)を楽にすること」と説明し、「働くのは自分のためではなく、人のため」で「お金のために働くのではなく、役に立つ仕事をしてお金をもらう」と熱く語った。

最後に、自身の介護施設事業を紹介し、「人間には生きている意味がある」「いのちは自分の使える時間。いじめで大事な時間を奪ってはいけない」といのちの大切さを訴えて、課外授業を締めくくった。



「人間は一人では生きていけない」と語る林社長

第18回 富山県立富山南高等学校

12月8日(土)、高瀬幸忠氏(株)インテック執行役員北陸地区本部長)が富山県立富山南高等学校において、1学年240名を前に、「ご縁に感謝」と題して課外授業を行った。

高瀬本部長は、まず、コミュニケーションの重要性について触れ、「挨拶」の「挨」は押す、「拶」は押し返す意味で、学校でも社会でも挨拶がコミュニケーションの基本であると語りかけた。

続けて、東京で勤務した際の日本語学校でのボランティア体験を語り、「ボランティアは自分の都合でやればよいのではなく、ひとの気持ちを思いやることや気持ちに伝えることが大切」と強調した。

また、「社会に出ると縁が増える。縁をつないで現在がある」と述べ、帝国ホテル社長の小林哲也氏の「もう一度会いたいと思う人との縁を活かすには、まず自分から何かを発信してみる。これこそがすべての始まりとなるのでは

ないか」という言葉と出会い、これを実践して実際に同氏と知遇を得たことを紹介。思い切ってトライしてみることがよい結果につながると論じた。

さらに社会に出てからはテーマを決めて活動していると語り、そのことがすべての関わりの基準となる、進学や社会に出てからも大変多くの情報から取捨選択することが重要となると訴えた。そして、米コロロンビア大学ビジネススクールのシーナ・アイエンガー教授の『選択の科学』から、優先順位をつけて行動することの意義を説き、すぐに答えを出さなければならない時に役立つと助言した。

最後にサミュエル・ウルマンの詩「青春」を朗読してエールを送り、課外授業を終えた。「小さな事の集まりが大きな成果を生む」と高瀬本部長



第19回 富山市立速星中学校

2月20日(水)、富山市立速星中学校において、1学年299名を対象に、今井壽子氏(㈲ゼフィール代表取締役)、川合紀子氏(㈲ステップアップ代表取締役)、高見貞徳氏(㈱アイベック取締役会長)、遊道義則氏(㈱ユニオンランチ取締役社長)の4名が「生き方を学ぶ」をテーマに課外授業を行った。

今井代表は、「葉都・富山を葉草いっぱいになりたいー安心して暮せる平和な世界を夢みながらー」と題して、授業を行った。

まず、大きな声で元気にあいさつし、笑顔を絶やさないようにすることが幸せになるコツだと語った。そして、自分の足でしっかりと立ち、自分の心を律することー自律と自立ーが大切であると訴えた。また「一冊でも多くの本を読んでほしい。豊かな心が自然と備わる」と述べた。さらに、当たり前なことを根気強く続けることで、達成感をもってほしいと続けた。

次に、「花街道プロジェクト」について触れ、市民や行政などと協働して、花で飾った美しい

街づくりに取り組んでいると紹介。家の近くなど身近なところから花を育て、富山を訪れる人々に喜んでもらえるようにしようと呼びかけた。

最後に「皆さんの活躍の舞台は世界に広がっている。旺盛な好奇心や思考力をもって前向きに挑戦してほしい」とエールを送り、授業を終えた。



生徒の謝辞を受ける今井代表

川合代表は、「『生き方を学ぶ』～“今できること”から始めよう～」と題して、授業を行った。

冒頭生徒に、「夢をもっているか」と問いかけた。そして夢をもてば自分の方向性が決まり、その実現に向けて目標を設定し、「考え抜く力」を養うことになることを強調した。

また、「今できること」と「将来できること」との優先順位をつけて学ぶことが大切だと述べ、「今できること」として、「自分の思いを素直に相手に伝えることが大切である」と語った。更にコミュニケーションは一方的であってはいけないと述べ、「自分の想いを相手に伝えるための力を養ってほしい」と呼びかけた。

また、人から言われてできなかったときは、人のせいにしたり、言い訳ばかり探してしまう

ことから、知識や情報、経験をもとに自分で考え自分で行動することが大切であると述べるとともに、「今できること」ができるようになると、「できること」と「できないこと」を真剣に考えられるようになると語った。

さらに、笑顔であいさつをすることも「今できること」のひとつであり、周囲も明るくなるので実践して欲しいと述べた。

最後に、「今できること」を見つけて、計画的に最後までやりとげようと語り、授業を締めくくった。



「考え抜く力」が必要と語る川合代表

高見会長は、「今、中学生として身につけておくこと」と題して授業を行った。

まず、人間が他の動物と異なる点として、「勉強や遊び、仕事など自分を高めるために時間を有効に使っていることである」と語り、人間に生まれたことに幸せを感じ、何事にも意欲的に取り組もうと呼びかけた。そして、ジョン・F・ケネディの大統領就任演説から「あなたの国があなたに何をしてくれるかを尋ねるのではなく、あなたがあなたの国のために何ができるかを考えて欲しい」の言葉を引用し、受け身ではなく自分から行動しようと強調した。

また、正月の箱根駅伝に触れ、前年低迷した日本体育大学が今年優勝したことを紹介。同校の監督が「走り込むことだけが練習ではない」として、起床・就寝時刻の徹底や、朝練習の義

務化、遅刻の厳禁など生活改善を行い、選手の間力や生活力を高め、団結力や競技力を身につけさせたと語った。

最後に、「最近はお世にたくないと考える人が多いが、国を背負って立つ心意気が欲しい」と訴えるとともに、リーダーの条件の1つに「人柄」をあげ、「人柄がよいと人が集まり、自分の助けとなる。そのため、人が困っていたら助ける、よい行いはさりげなく行うこと」と締めくくり、授業を終えた。



「やる気をもって行動しよう」と訴える高見会長

遊道社長は、『「言葉の力に気付こうよ！」－全てはコミュニケーションから始まる－』と題して、授業を行った。

最初に、考え方や言葉の使い方の違いで行動が変わると語りかけ、時間を例に『「まだ30分も残っている』』と考え、余裕を持っている人は『もう』と捉えて緊張感をもとう。『もう30分しか残っていない』』と考え、焦りを感じている人は『まだ』と捉えて落ち着きを取り戻そう』と呼びかけた。

続けて、「目標」と「目的」は、言葉は似ているが本質的には異なるものであると説明。『「目標」は定量的であり、達成するものであるが、『目的』は定性的であり、追求するものである』と解説した。そのうえで、「目的」を持ち、自分の立ち位置を認識して、「目標」を立てようと訴えた。また、「ちょっと頑張れば達成できるサイズ」の

「目標」にすれば達成感が味わえると激励した。

さらに、言葉の持つ不思議な力について、①言葉は単なる道具ではないので本質を掴む、②好きな話をする時は皆笑顔になる、③プラスの発想をすればプラスの行動になる、などと述べた。

最後に、「言葉の力」を活かすためには、素直に聴くこと、積極的に発言すること、話し合いに貢献すること、責任を持つことが大切であるとして、自分の可能性を信じ、誰よりも自分を好きになって、人生を成功させてほしいとエールを送り、授業を終えた。



「成功とは目標達成の数だ」と語る遊道社長

第20回 富山市立岩瀬小学校

3月1日(金)、高見貞徳氏（㈱アイベック取締役会長）が富山市立岩瀬小学校において、全学年157名を前に、「夢に向かって!」と題して課外授業を行った。

高見会長は、まず、子どもたちに「夢を教えてください」と語りかけた。子どもたちがそれぞれに答えると、「夢を持つことはとても大切なこと。夢は元気の源だ」と述べた。そして、「夢は成長とともに変化してもよい」と語るとともに、「夢は持っているだけではなく努力して実現させるものだ」と強調した。

続けて、夢を実現させるためには、「当たり前前」のことを当たり前前にできる人になることが必要だ」と論じた。そして、「当たり前前なこと」とは、①元気であること～体も心もいつも「元気」であることが一番～、②規則正しい生活を守ること～休日でも起床・就寝時刻を守ろう～、③外で

遊ぶこと～花、草木や生物にも直接触れてみよう～、④何かを毎日続けること～どこまでできたかを記録しよう～、⑤地域の友だちと遊ぶこと～「ガキ大将」が育ってほしい～、などと訴えた。

最後に、NHK総合テレビで放送中の「ダーウィンが来た!」を紹介し、番組で登場する野生動物と人間が異なる点を説明。人間として生まれてきてよかったと語り、講演をしめくくった。

当日は創校140周年記念式が開催され、保護者や関係者など参加者も聴講した。



「当たり前前」のことを当たり前前にできる人になろうと呼びかける高見会長

第21回 富山県立呉羽高等学校

3月5日(火)、新田八郎氏（日本海ガス㈱取締役社長）が富山県立呉羽高等学校において、1学年229名を前に、「これからの日本を担うみなさんへ」と題して課外授業を行った。

新田社長は、はじめに、学校は「縁」の宝庫で、この「人の縁」を大切に育てて欲しいと語りかけた。そして、「ライバルは敵ではなく仲間である。足を引っ張ることをせず大切にしたい」と訴えた。

また、「人は一生勉強しなければならない」と強調し、勉強と楽しくつきあう方法として、自分のやり方で工夫して取り組むことが大切であると呼びかけた。さらに、勉強する理由は幸せな人生を送るためであり、「よりよく人を幸せにした人がより幸せになれる。それは人のために尽くすことや働くことだ」と語った。そして、

「将来どのような職に就きどのような知識やスキルが必要になるかわからない」と続け、中学・高校時代の基礎学力がしっかりしていれば将来の選択肢が広がると強調した。

さらに、受験については嫌なことだと考えず、将来待ち受けている「楽しみ」をイメージして頑張ることが大切であると語った。そして、「とり返しのつかない失敗はない。失敗からの立直り方をトレーニングしていくことも人生の役に立つ」と激励した。

最後に、英語やICTの重要性、グローバル社会への対応などを訴えて、授業を終えた。



勉強との楽しいつきあい方を見つけてほしいと新田社長

第22回 黒部市立生地小学校

3月8日(金)、林和夫氏(朝日建設㈱取締役社長)が黒部市立生地小学校において、6学年35名を前に、「夢をもって」と題して課外授業を行った。

林社長は、まず、吉田松陰の「夢なき者に理想なし。理想なき者に計画なし。計画なき者に実行なし。実行なき者に成功なし。故に、夢なき者に成功なし」の言葉を紹介。「夢は持っているだけではなく、理想を持って計画を立てて実行しよう」と呼びかけた。そして、コンピュータに情報が入っていないと意味がないことを例にあげて、「からっぽの頭から創造力は生まれない」と、読み書きそろばん・暗記の重要性について力説した。

続けて、「働く」の語源は「端(周りの人)を楽にすること」と述べ、「働くのは自分のためではなく、人のため」で「給料のために働くのではなく、役に立つ仕事をして給料をもらう」と

説いた。そのうえで、「自分の夢はふるさと富山の発展」であり、その実現のために「働いている」と熱く語った。

さらに、コミュニケーションはキャッチボールのようなものだと言った。実際にキャッチボールを行い、誤ったコミュニケーションのとり方をわかりやすく示した。

最後に、「人間が生きているのには必ず意味がある」「命は自分の使える時間。いじめで大事な時間を奪ってはいけない」と命の大切さを訴えて授業を締めくくり、長年慣れ親しんだ学び舎を旅立つ子どもたちへの餞とした。



「人間が生きているのには必ず意味がある」と諭す林社長



教員対象の講演

人生は複線 広い視野で生徒に向き合う ―新田特別幹事が射水市小中学校教員に講演―

8月1日(水)にアイザック小杉文化ホールで開催された「平成24年度射水市教育講演会」において、新田八朗氏（日本海ガス㈱代表取締役）が「21世紀を担うひとづくり」と題して、約480名の教員を対象に講演した。

新田社長は、①ファミリーパークを教師・子どもも体験する（生態系、環境問題を考える場である）、②身内の葬式は、死・生・命を考えるよい機会であり、必ず出席させる、③学ぶ目的は将来働くためであるとはっきり伝える、④人生にはいろいろな選択肢があることを伝える、⑤組織活性化はPDCAを愚直に行う、以上を主旨として講演を行った。人生の選択肢については、村上龍氏の著書『13歳のハローワーク』を紹介。世の中には514種類もの職業があり、人

生の選択肢は一本道ではないことを早い時期に教えてほしいと語った。

また、グローバル化への対応として、子どもたちの英語やICT習得の必要性とともに、教師自らも海外に出掛けるなど広い視野を持つ必要性や、子どもたちに挨拶・掃除・人の話をよく聞くことを通じてパブリックマインドを身につけさせる重要性について説いた。

最後に日々自己研鑽を図り、子ども達には人間性をもって相対してもらいたいと要望し、講演を締めくくった。



適切な指導には人間力向上が必要 ―牧田幹事が小矢部市現職教員研修会で講演―

8月3日(金)小矢部市総合会館で開催された「平成24年度小矢部市現職教員研修会」において、牧田和樹氏（㈱牧田組 取締役社長）が「企業におけるリスクマネジメント」と題して、約30人の小矢部市・砺波市・南砺市の教職員を対象に講演した。

牧田社長は冒頭、もともと「リスクマネジメント」という言葉は金融から出てきた言葉であるが、人命にかかわるような重要なものは、マネジメントできない。自分の携わる建設業も教育の世界も人命に関わる職業でありリスクはゼロでなければならないと説明した。

その上で、適切な問題解決方法として、①常に原因と結果で物事を考えること、②人には心があり、相手の立場を考えること、③価値観・知恵を持って「生活する」ことが大切であると解説した。

また、大津市の中学2年生が自殺した件に関連し、いじめに対しては担任が加害者・被害者と向きあって白黒をつけ、その判断に対して苦情があれば校長・教育委員会がフォローしていく体制が必要であると主張。加えて子どもには価値観をしっかりと教える必要があると力説した。

さらに、「よりよく生きるためには、『人間力』が必要。『人間力』とは考え方（＝価値観）×知恵（知識×経験）で表現できる」「考え方は『FOR ME』ではなく『FOR YOU』を心がけ、読書・人脈づくりで知識を高めていくことが、リスクに対して正しい判断につながる」と語った。



子どもたちはふるさとを想い困難に挑戦を ―大橋前教育問題委員長が滑川市の教員に講演―

8月7日(火)に滑川市立早月中学校ふれあいホールで開催された「平成24年度滑川市教育セミナー」において、大橋聡司氏（大高建設㈱取締役社長）が「企業が学校教育に望むこと」と題して、市内小中学校教員約180名を対象に講演した。

大橋社長は、建設業の新しい分野の進出としてはじめてのレストラン事業が撤退を余儀なくされたが、起業精神である「人財育成」に立ち返り、徹底した教育を施して新たなレストラン経営を軌道に乗せた事例や、累積赤字の第三セクター会社の再建に自ら範を示しながら社員一丸となって経営に取り組んでいる事例等を紹介した。

そして、企業経営において新しいものにチャレンジし、新しい価値を生み出していくことが大切だと述べ、これらはふるさとをよくしたい

という想い、情熱からきていると語った。しかし、青少年意識調査結果をみると、日本の今の子どもたちは中国・韓国に比べ『やりたいことに困難があっても挑戦したい』と考える比率が低いと指摘した。

また、教育問題委員会の取組み、なかでも過去3回の海外教育事情視察について、日本と海外との違いを丁寧に説明するとともに、前次委員会で発表した提言などについて説明した。

最後に、「富山経済同友会としてもできる限り協力させていただくので、様々な力を活用して正しい教育をやっていただきたい」と強く要望した。



人格を磨き、後進の指導を ―富山市中学校長会で中尾特別顧問が講演―

8月10日(金)、中尾哲雄特別顧問は高志会館で開かれた富山市中学校長会で「中学校教育に望む～人材育成の観点から～」と題して講演を行った。

最初に、中学校教育50周年を迎えた平成9年の楠頭秀富山県教育委員長（当時）の言葉を引用し、「登校拒否やいじめ問題、自我形成途上の生徒への対応など中学校の先生方の苦労は今も当時も同じ。中学教育は簡単に変わるものではないとの思いを強くした」と語った。

そして、「社会情勢が教育と深い関わりがあることを教育者は認識すべき」と力説。エネルギー問題では「失敗を活かし、失敗のない原子力発電所を作っていくことが必要」と述べ、ネットワーク社会について「企業活動に一番必要なのは対人能力。ネット社会の進展が対人能力の低下を招いた。中学教育でどのように取り組んでいくかが課題」と問題提起した。また、子どもの無気力化にも触れ「何故学ぼうとしないの

か、やる気がないのか、先生方にはその原因を追究してほしい」と投げかけた。

また、国際化進展の中、「日本が生き残りを図っていくには、学校が子どもをしっかり育て、企業が受け入れていく。そのために中学生には意欲を持たせることが大切」と述べるとともに、行き過ぎた個性教育を戒め「個の大切さばかり訴えるのは問題。教育基本法にも民法と同様に『権利の濫用』の注釈をつけるべきだ」と注文をつけた。

最後に「指導者には知性、説得力、体力が必要。またその根底には優しさが欠かせない。畏怖の念を抱かせる先生を目指してほしい」、「師弟の関係が温かい社会を創る。自らの人格を磨き、リーダーとして後進を指導して欲しい」と力説した。



いま求められる教育の姿 ―林特別幹事が富山市小学校教頭会で講演―

1月16日(水)に富山市立速星公民館で開催された「平成24年度富山市小学校教頭会・全体研修会」において、林和夫氏（朝日建設㈱取締役社長）が「私の教育観」と題して、富山市の小学校教頭68名を対象に講演を行った。

林社長は、はじめに、自身の平成13年5月のコラム「熱血授業 小島先生の百日」について説明。終戦前に南太平洋で戦死した21歳の青年教師が、戦時中に100日間だけ教壇に立ち、暗算競争と読み書き計算の反復練習によって子どもの意欲を沸き起こし、出征後も教え子たちに思いを込めた手紙を送ったことを紹介。読み書きと計算という基礎の訓練と「規律、礼儀、自主」の精神をもって指導した青年教師の姿を通じて、教師の熱意と師弟の絆やいま求められる教育の姿への想いを熱く語った。

また、京セラ名誉会長の稲盛和夫氏の言葉を

引いて、能力は「才能」「経験」「意欲」「考え方」の掛け算だと紹介し、学校経営においても「考え方」が重要と訴えた。

さらに、「働く」の語源は「端(周り)を楽にすること」と説明。「自分のためではなく、人のために働く」のであり、「給料のために働くのではなく、役に立つ仕事をして給料をもらう」と強調するとともに、「人は経費ではなく資源だ」と述べた。

最後に、課外授業では子どもたちに、「人間には生きている意味がある」「いのちは自分の使える時間。いじめで大事な時間を奪ってはいけない」と訴えていると紹介し、講演を終えた。



知識と経験の伝授者を目指してほしい ―若林副代表幹事が指導主事等に講演―

1月28日(月)に富山県総合教育センターで開催された「平成24年度第13回指導主事等研修会」において、若林啓介氏（㈱若林商店取締役社長）が「教員に期待すること」と題して、指導主事等約70名を対象に講演した。

若林社長は、まず、経済人として期待することは、「社会に求められる人材の育成」であり、教員には知識と経験の伝授者、「よき大人の見本」になってほしいと訴えた。

続けて、日本社会が直面する諸問題について理解を深めてほしいと述べ、平均寿命、一人当たりGDPや殺人件数などを世界と比較して、日本は安全で豊かで長生きできる「恵まれた国」と語った。しかし、人口減少、グローバル化や自然災害リスクなどが国力の低下の招くのは必然的であり、わが国が目指すべき方向として、

よい教育を行い、よい人材を育てることにかかっていると熱く語った。

また、求められる能力と教育の果たすべき役割について紹介。学校生活で習得できる社会的基礎力やコミュニケーション能力、読み・書き・そろばん、健康管理などの基礎学力と基礎体力はとりわけ重要であり、個性は大切だが基本をしっかりと押さえることが極めて重要だと語った。さらに、変化への適応能力や共通の価値観を持つことの重要性を理解して欲しいと述べた。最後に、人材育成に携わる教員にエールを送り、講演を締めくくった。

